

研究課題名 『フランケンシュタイン』の女性被造物としての『マチルダ』

研究代表者 市川 純

父と娘の近親相姦的な愛情による悲劇を描いたメアリ・シェリーの中編小説『マチルダ』は、彼女の最初の小説『フランケンシュタイン』(1818)が出版された翌年に書き始められた。初期の『マチルダ』研究は、伝記的側面に注目した分析が多かったが、近親相姦という主題ゆえにその心理学的側面に着目した先行研究が多く生まれ、伝記的事実の検証を含みながらも、精神分析学の理論を枠組みとして、主人公マチルダとその父、さらには作者シェリーと父ゴドウィンとの関係を解明する試みが多く見られる。また、本小説の随所に見られる様々な文学作品への言及から、間テクスト性の側面から『マチルダ』を考察するものも多い。これら伝記的研究、心理学的研究、間テクスト性の議論は相互に影響を与え合い、補完し合って議論が展開してきた。

これらの先行研究を踏まえた上で、本研究は『マチルダ』を前作『フランケンシュタイン』との連続性の中で考察し、『フランケンシュタイン』との強い関連性を見出せる特徴を整理し、前作で十分に表現できなかった、あるいは抑圧されていた女性の登場人物たちの声が『マチルダ』の中で解放されているのではないか、という点から論証を試みた。

伝記的にシェリーを近親相姦の実体験と結びつけることは難しいが、近親相姦のエピソードを含むオウィディウスやアルフィエーリの作品を読んでいたことは明らかである。また、実際にイタリアで起こったチェンチ家の近親相姦事件で犠牲になったベアトリーチェの肖像画を見たり、夫パーシー・ビッシュがこの事件に取材した劇『チェンチ一家』を書くなど、この問題に触れる機会は多かった。

ただし、『マチルダ』において重視されているのは行為としての近親相姦ではなく、近親相姦的な情愛における心理的葛藤、罪悪感、自責の念である。その禁断の情愛を抱いた父は自らを「怪物」と形容し、マチルダは「怪物」となった父の犠牲者である。この表現以外にも『フランケンシュタイン』を彷彿とさせる場面は多く、両作品の結びつきは強い。二作品の間には作者の意識において連続性があると考えられ、『マチルダ』で主人公マチルダが全編に渡って語り手を務めることで、『フランケンシュタイン』では埋没していた女性登場人物が大々的に声を上げる機会を提供されている。しかも、それは犠牲者としての女性の声であり、フランケンシュタインや彼が作り出した怪物の犠牲となって、自らの感情や思想を十分発言しないままに葬られた女性がここで声を上げているのだ。